

理解度&釣れる度100%



マルキュー

優良 餌本



パワーエサ



The target period 12月~5月

Contents

- 02 ウドンセットの浅ダナ釣り
- 03 ウドンセットのチョーテン釣り
- 10 段差の底釣り
- 16 両グルテンの底釣り (新べらねらい)
- 20 バランスの底釣り (早春)
- 26 両ダンゴの浅ダナ釣り (早春)
- 30 平場の底釣り (早春)
- 34 くわせエサの使い分け

2024 冬春号

HERA BAIT POWER BOOK

寒季に数を釣る定番釣法

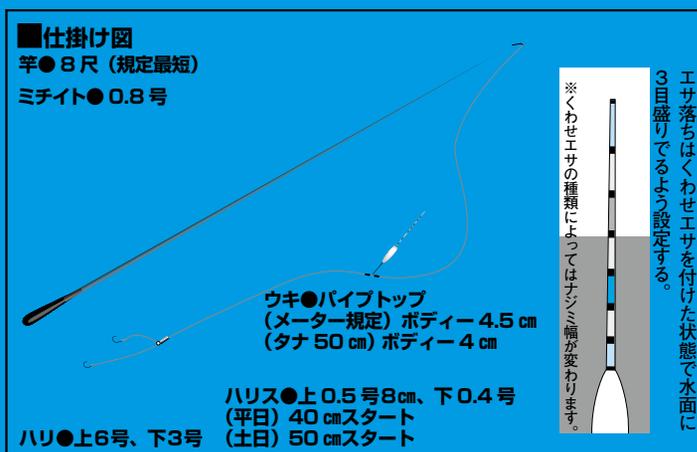
ウドンセットの 浅ダナ釣り

釣り方の基本

冬になるとへら鮒の活性が下がり、積極的にはエサを追わなくなります。そうなりとダンゴエサではなかなか思うようには釣れなくなります。こういう場面で有効なのがウドンセット釣りです。バラケエサを打つことでへら鮒を寄せ、寄ってきたへら鮒にくわせエサを食わせます。ただし、このバラケエサをただ闇雲に打てば釣れるかといえばそうではありません。自分が釣るタナに集めなくてはなりません。それには正確なエサ打ちと、バラケエサがバラけすぎないようにすることです。元々バラケエサはバラけやすいブレンドですが、これをタナまで持たせることが重要なのです。ですから、バラケエサの重さがウキにしっかり掛かり、打ち始めはウキのトップが沈没するぐらいにエサを持たせます。釣れないときは、エサ持ちがあまくなっていることも多いので注意しましょう。

タックルセッティング

竿はエサ打ちのコントロールがしやすく、回転数も稼げる釣り場規定の最短の長さを選びます。冬の釣りでは、まずウキが動くようセッティングしますので、下ハリスは長めからスタートします。



微粒子系でエサが持たせやすいブレンド

●バラケブレンド

「粒戦」50 cc+

「粒戦細粒」50 cc+

水 150 cc

「セット専用バラケ」150 cc+

「バラケマッハ」200 cc

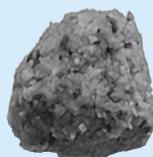


●作り方と打ち始め

「粒戦」50 cc、「粒戦細粒」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水150 ccを注ぐ。吸水させるために5分（厳寒期は10分）ほど放置する。そこへ「セット専用バラケ」150 ccと「バラケマッハ」200 ccを入れ、20～30回かき混ぜてムラなく仕上げる。これが基エサで、使うときは押し練りでエアを抜き、エサが持つよう調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号

●タナを深くする

しばらくエサ打ちしても何の反応も得られないときは試しにタナを深くしてみよう。特に厳寒期になるとへら鮒は上層に上がってこないこともある。たとえメーター規定のある釣り場でも1mのタナで釣らなくてはいけないことはないので、10cmずつ深くして様子を見てみよう。

●ハリス調整

少しでも魚の反応を得たいのでスタート時の設定は長めにしている（平日40cm、休日50cm）。これでアタリが多くでて、空振りやイトズレなどが目立つときは5cm詰めてみよう。それでも空振りが多ければさらに5cm詰めていく。もしハリスを詰めてアタリが減るようなら元の長さに戻すこと。動きが減ってしまうより動きがあるほうを優先したい。

●くわせエサを使い分ける

ウドンセット釣りで使うくわせエサは何種類かあります。基本は「感嘆」をおすすめしますが、ときに「力玉」のほうがよくアタる場合もあります。落下の仕方や重さの違いが影響していますが、目先の変化で釣れることもあるので、アタリが減った、空振りが目立つときなどは、「感嘆」と「力玉」で差がでるかを確認してください。

●ハリを使い分ける

くわせのハリを換えることでアタリ数に差がでることがあります。号数でもいいですし、重さの違いで使い分けてもいいでしょう。アタリが少ないときは軽いもの、動きが多いときは重めにする覚えておきましょう。

●上手く釣れないときは……

サワリやアタリがほとんどない、ウキが動かないときは、浅ダナが成立しない状況と判断します。タナの違う釣り、チョーチンセット（6ページ）や段差の底釣り（10ページ）に切り替えましょう。

ウドンセットの浅ダナ釣り

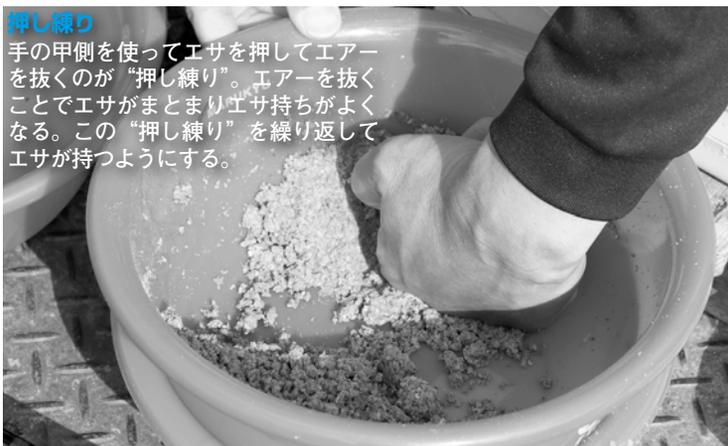
実釣基本テクニック

●エサを調整する

バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくいものです。ですから、できあがったエサをそのままハリ付けすることはむずかしいのです。あまりエサをいじるなどと言われますが、エサを持たせられなければ釣りが成立しません。まずは、押し練りをしてアエーを抜きまとめやすい状態にします。それをエサ付けてエサが持つかを見ます。もしこれで持たなければさらに押し練りを加えて、エサが持つ状態にします。まずは、エサを持たせること。ここからがスタートです。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しアエーを抜くのが“押し練り”。アエーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度か繰り返しながらエサを持たせられる接点を見つけよう。

もし上手く持たせられなければ……

先に紹介したブレンドの「バラケマツハ」を50cc増やして250ccにしてください。硬さがでて持たせやすくなります。



バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくい。

寒季に安定して釣れる

ウドンセットの チョーチン釣り

釣り方の基本

寒くなるにつれ、活性の下がるへら鮒は水温の安定した層にじっとしていることが多くなります。そうすると浅いタナではなく、少し深いチョーチン釣りの出番です。エサ打ちやタナのコントロールが難しい浅ダナにくらべ、一定のポイントにエサが打てるチョーチン釣りは時合ができやすく、安定して釣れるメリットがあります。この釣りも浅ダナ同様、自分が釣るタナに集めなくてはなりません。ですから、バラケエサの重さがウキにしっかり掛かり、打ち始めはウキのトップが沈没するぐらいにエサを持たせます。次第に魚が寄ってくるとナジミが少なくなってきますが、その場合はエサをしっかり付けて同じナジミ幅をキープするよう心がけます。また、この釣りでは縦誘いを活用します。バラケエサが持ちすぎたとき、バラケエサが抜けてくわせエサだけになったとき、竿先を持ち上げるように縦誘いをしてみましょう。これに反応してアタリがでることも多いのです。

タックルセッティング

竿の長さは水温が下れば下がるほどへら鮒が下層へ下がるので長くなります。短い竿で動きが少ないときは迷わず竿を長くしましょう。

■仕掛け図

竿●8～13尺
ミチイト●0.8号

ウキ●グラスムクトップ
(8～10尺) ボディー6cm
(11～12尺) ボディー7cm
(13尺) ボディー8cm

ハリス●上0.5号8cm、下0.4号
(平日) 50cmスタート
(土日) 60cmスタート

ハリ●上7号、下3号

※くわせエサの種類によってはナジミ幅が変わります。

エサ落ちらばくわせエサを付けた状態で水面に3目盛りできるように設定する。

重さとまとまりでタナを作りやすいブレンド

●バラケブレンド

「粒戦」100 cc+

「粒戦細粒」50 cc+

水 200 cc

「ヤグラ」100 cc+

「カクシン」100 cc+

「セット専用バラケ」100 cc



●作り方と打ち始め

「粒戦」100 cc、「粒戦細粒」50 ccをエサポウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 200 ccを注ぐ。吸水させるために5分（厳寒期は10分）ほど放置する。そこへ「ヤグラ」100 cc、「カクシン」100 cc、「セット専用バラケ」100 ccを入れ、20～30回かき混ぜてムラなく仕上げる。これが基エサで、使うときは押し練りでアэрを抜き、エサが持つよう調整する。

●竿の長さでタナを探る

短い竿で釣れるほうが釣りは簡単です。ですが、厳寒期になるとへら鮒はなかなか上層には上がってきません。サワリ、アタリなどウキの動きが少ないときは、迷うことなく竿を長くして深いタナを探ってみましょう。1尺違っただけでアタリ数が増えることもよくあります。

●ハリス調整

少しでも魚の反応を得たいのでスタート時の設定は長めにしているが（平日 50 cm、休日 60 cm）、混雑時や厳寒期になると簡単にはウキは動いてくれません。そういう場合はハリスをもっと長くして反応を増やしますが、ハリスが長い分釣りづらくもなります。目安として最長で70 cmと覚えておきましょう。

●くわせエサを使い分ける

ウドンセット釣りで使うくわせエサは何種類かあります。基本は「感嘆」をおすすめしますが、ときに「力玉」のほうがよくアタる場合もあります。落下の仕方や重さの違いが影響していますが、目先の変化で釣れることもあるので、アタリが減った、空振りが目立つときなどは、「感嘆」と「力玉」で差がでるかを確認してください。

●ハリを使い分ける

くわせのハリを換えることでアタリ数に差がでることがあります。号数でもいいですし、重さの違いで使い分けてもいいでしょう。アタリが少ないときは軽いもの、動きが多いときは重めにする覚えておきましょう。

●上手く釣れないときは……

竿の長さを換えたり、ハリスを伸ばしてもサワリやアタリがほとんどない、ウキが動かないときは、宙釣りが成立しない状況と判断し、底をねらう段差の底釣り（10 ページ）に切り替えましょう。

ウドンセットのチョーチン釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくいものです。ですから、できあがったエサをそのままハリ付けすることはむずかしいのです。あまりエサをいじるなどと言われますが、エサを持たせられなければ釣りが成立しません。まずは、押し練りをしてアアーを抜きまとめやすい状態にします。それをエサ付けてエサが持つかを見ます。もしこれで持たなければさらに押し練りを加えて、エサが持つ状態にします。まずは、エサを持たせること。ここからがスタートです。



エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度か練り返しながらエサを持たせられる接点を見つけよう。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しアアーを抜くのが“押し練り”。アアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

厳寒期の切り札

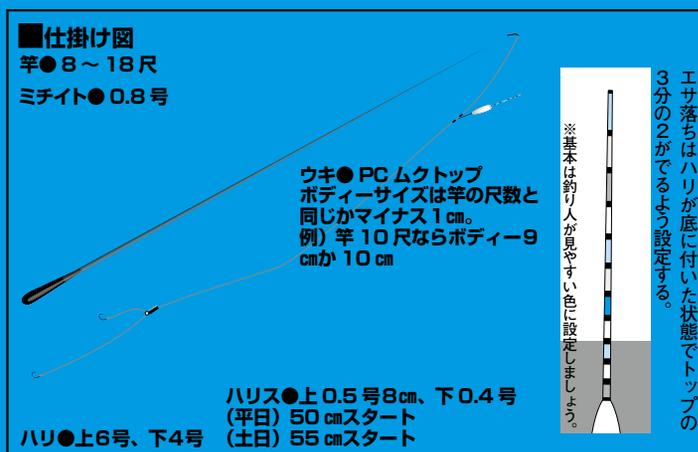
段差の底釣り

釣り方の基本

年末から年を越して2月ぐらいまではへら鮎の活性が最も低下する時季です。こうなるとへら鮎はエサを追って宙層を泳ぐことが減り、底近辺でじっと動かなくなります。この厳しい厳寒期の切り札的釣り方が段差の底釣りです。バラケエサを底にためることでへら鮎を底に寄せて釣っていきます。ですから、バラケエサが落下中に抜けてしまったら、拡散範囲を広げすぎないことがポイントになります。浅ダナやチョーチン釣り同様、しっかりとバラケエサの重さでウキのトップがしっかりナジむことが大前提です。ナジミが少なくなると次第に魚はウワズってしまい、イトズレなどの動きはできますが、肝心の食いアタリがでなくなります。そしてもうひとつ重要なのが、くわせのウドンが必ず底に着いていること。そのためにもタナ取りは重要なので慎重に行ないましょう。

タックルセッティング

竿の長さは水深に合わせてみます。ウキの位置がチョーチンになるほうが釣りやすく、中途半端にあまったり、穂先との距離が近すぎても釣りづらいので注意しましょう。



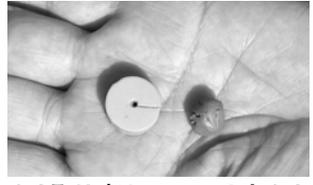
タナ取り方法

①宙の状態のエサ落ちを確認

上下両方のハリを付け、宙釣りの状態のエサ落ちを確認する。

②タナを測る

下バりにタナ取りゴムを付け、ウキにフロートを差して水深を測る。普通に打ち込んだだけでは沖を測ってしまうので、ウキを持ち上げるように竿先をあげ、ウキの下にタナ取りゴムがくるようにする。トップ先端が水面にでる位置にウキをセットする。このとき、左右の水深も測っておくこと。



タナ取り時は、フロートとタナ取りゴム（粘土オモリ）を使うと素早く測ることができる。

③ウキをズらす

水面にでたトップ先端の位置に合わせてようにミチイトに目印のトンボを付け、その位置に宙で決めたエサ落ち目盛りを合わせる。これが下バリトントンといわれる設定だが、これでは下バリが底から切れる可能性が高いので、ここから5cmウキを上へ動かしてスタートする。

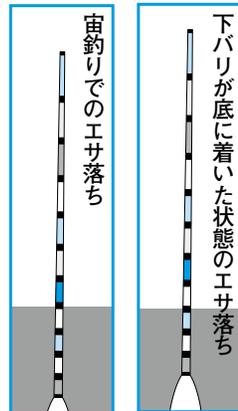


目印のトンボを基準にしてウキの位置を動かす。

④下バリが底に着いた状態のエサ落ちを確認

ウキをズラしたらエサを付けない状態で打ち込み、エサ落ちを確認する。下バリが底に着いていれば、下バリの重さがウキにかからないので、宙で確認したエサ落ちより目盛りは多くでる。それが確認できればOK。

仮に宙で決めたエサ落ちを7目盛りだとすると、下バリが底に着いた状態では7目盛り以上水面にでることになる。ただし、実釣においては水流や底の状態などで必ずこの目盛りがでるとはかぎらないが、7目盛りより沈んで戻ってこない場合はタナをズらす（深くする）かタナを測り直すこと。



水深が深い場合 (11 ~ 18 尺)

●バラケブレンド

「粒戦」50 cc+

「とろスイミー」50 cc+

水 150 cc

「ヤグラ」200 cc+

「段底」200 cc



●作り方と打ち始め

「粒戦」50 cc、「とろスイミー」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 150 ccを注ぐ。吸水させるために5分（厳寒期は10分）ほど放置する。そこへ「ヤグラ」200 cc、「段底」200 ccを入れ、20～30回かき混ぜてムラなく仕上げる。これが基エサで、使うときは押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。

水深が浅い場合 (8 ~ 10 尺)

●バラケブレンド

「粒戦」50 cc+

「粒戦細粒」50 cc+

水 150 cc

「ヤグラ」300 cc+

「セット専用バラケ」100 cc



●作り方と打ち始め

「粒戦」50 cc、「粒戦細粒」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 150 ccを注ぐ。吸水させるために5分（厳寒期は10分）ほど放置する。そこへ「ヤグラ」300 cc、「セット専用バラケ」100 ccを入れ、20 ~ 30回かき混ぜてムラなく仕上げる。これが基エサで、使うときは押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。

●しっかりナジませる

底釣りの大敵でもあるウワズリを防ぐためにも、落下中の動きを抑え、しっかりウキをナジませることが基本です。押し練りでエサを持つように調整するだけでなく、きれいに丸くエサ付けすることで落下中のエサの開きが抑えられます。上手くナジませられないときに試してみましょう。

●ハリス調整

宙釣りとは違い、動きを増やすよりは確実にアタリがでてヒットする長さを目指します。できればスタート時の長さのまま釣りたいですが、極端に渋いときはハリスを長くすることもあります。このときの目安は最長で70cmまで。ハリスの長さでアタリを増やすのではなく、アタリがでるまで我慢して待つぐらいの心構えです。

●くわせエサを使い分ける

段差の底釣りでは、くわせエサが底に確実に着いている状態にしたいので、重さがある「魚信」か「力玉ハード(L)」を選択しましょう。ただ、底の状態(へド口が多くてくわせエサが潜りやすい)や活性が低く吸い込みが弱いときには軽くくわせが有効なこともあります。アタリがでにくいなと感じたら「感嘆」や「力玉」も試してみましょう。

●置き直し

流れでシモってしまったり、底の状態でエサ落ち目盛りがでてこないこともあります。そういうときは、竿先を持ちあげてくわせエサを置き直してください。これでアタリがでることも多いです。

●もし動きすぎたら……

渋い時季の釣りですので基本的には動きは少なめです。ただし、新べらが多くウキが動きすぎる場合もあります。そのときは、新べら狙いに切り替え、両グルテンの底釣り(16ページ)に釣り方を変更しましょう。

段差の底釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくいものです。ですから、できあがったエサをそのままハリ付けすることはむずかしいのです。あまりエサをいじるなどと言われますが、エサを持たせられなければ釣りが成立しません。まずは、押し練りをしてエアーを抜きまとめやすい状態にします。それをエサ付けしてエサが持つかを見ます。もしこれで持たなければさらに押し練りを加えて、エサが持つ状態にします。まずは、エサを持たせること。ここからがスタートです。



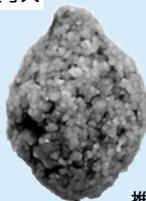
エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度か練り返しながらエサを持たせられる接点を見つけよう。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号

新べら狙い!

両グルテンの 底釣り

釣り方の基本

厳寒期の底釣りといえば、段差の底釣りが定番です。ただし、新べら放流直後などで、新べらの動きが活発なときもあります。こういう状況になると段差の底釣りではウキが動きすぎて釣りづらくなります。冬なので“段底”想定で釣り場を訪れることも多いですが、ときに思いがけない高活性に恵まれることもありますので、グルテンエサは必携です。食い気のある新べらが溜まっているエリアの釣りなので、エサは寄せを意識するのではなく食わせることを重視します。ですから自ずとブレンドも食わせタイプとなります。つまりエサはしっかり持つものを使いますので、当然釣り方もエサをしっかりナジませて釣っていきます。またフレッシュな個体を釣り続けるために、長竿の沖打ちをオススメします。釣り場の水深にもよりますが、16尺以上の竿で2～3本ぐらいの水深が最適な条件となります。竿一杯（チョーチン）で釣るときもやや沖にエサを打つようにします。

タックルセッティング

ウキのボディーサイズは14cm前後を基準とし、流れが強かったり、振り込みがしにくい場合は迷わずサイズをアップする。



食い気のある新べらにアピールする

●エサブレンド

「わたグル」50 cc+
「いもグルテン」50 cc+
水 120 cc



+



+



エサの大きさどハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

●作り方と打ち始め

「わたグル」50 cc、「いもグルテン」50 ccをグルテンボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 120 ccを注ぐ。全体に水がゆきわたるよう 20 回ほどよく混ぜる。若干固まりだしたタイミングでグルテンボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。2～3目盛りのナジミ幅ができれば OK。それより浅ナジミならさらに押し練りを加える。

●タナ取り

底釣りはタナ取り（水深を測ること）がすべてといわれるほどタナは重要です。釣りを始める基準であり、地形変化や底の状態の変化（釣っている途中でヘドロやゴミが取り除かれて水深が変わること＝底が掘れた）を知るための唯一の手段です。このタナ取りをおろそかにしては底釣りは釣れません。動画でわかりやすく解説しているのでチェックしましょう。



●沖へエサを打つ

フレッシュで食い気のある新べらがターゲットなので、やや沖を狙うのがセオリー。竿一杯（チョーチン）で釣る場合でも、ウキの立つ位置より50cmほど沖にエサを打ちましょう。タナ2～3本で穂先からウキの間があまる場合は、やや振り切り気味のエサ打ちをします。

●ナジミ幅を意識しよう

底釣りでは両グルテンにかぎらず、ウキのナジミ幅が重要な情報源です。エサ持ちの有無だけでなく、底が掘れた（ヘドロなどが取れること）、ハリスが絡んだなどを知る手がかりです。両グルテンの底釣りの場合、2～3目盛りのナジミ幅がでるのが基準です。これよりナジミが少ない場合は、エサが持っていないかタナをはわせすぎていることになります。逆に多い場合は、タナが底から切れている、ハリスが絡んでいる可能性があります。そして寄る魚量が増えても同じナジミ幅をキープできるようにエサを調整（押し練り、手揉み、エサの大きさ）して釣っていきます。

●上手く釣れないときは……

両グルテンでウキの動きがおとなしい場合は、それほどへら鮎の活性が高くない証拠。バラケエサを使ってへら鮎を寄せることができる段差の底釣り（10ページ）に釣り方を変更しましょう。

両グルテンの底釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

グルテンエサはエサ持ちがよいと思われませんが、水に入ると水分を吸って膨らみ魚のアオリが強いつきはハリから抜けやすくなります。また、グルテンエサはそのまま使えとも言われますが、エサが持つように押し練りや手揉みでの調整は躊躇せず行ないます。



エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度か練り返しながらかエサを持たせられる接点を見つけよう。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押し、エアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。

手揉み

つまんだエサを指先で揉むようにして丸めてエサ付け。この手揉みの回数でエサ持ちを調整する。



早春に効く

バランスの底釣り

釣り方の基本

“春は底を釣れ！”という格言があるように、春先になると、底釣りが面白くなります。冬場に深いタナでじっとしていたへら鮒が水温の上昇とともに活性をあげ、徐々に浅いタナへと移動します。この際に、カケアガリを伝えて浅場へと動きますので、春先は底釣りが有効なのです。この時期のへら鮒は、まだ活性の低い個体もいれば、食い気をだしたやる気のある個体も増えてきます。そういう不安定な活性なので、エサもそれに合わせるように、両グルテンと両ダンゴの中間的な位置付けになるブレンドが効果的です（ブレンドは次頁）。釣り方はいわゆる底釣りですので、基本どおりエサをしっかりナジませることを意識してください。竿の長さは釣りやすさ重視で竿一杯（チョーチン）で底が取れる長さを選択してください。

タックルセッティング

ハリス段差は8cm。活性がありウキが動くようなら5cmずつ短くし、逆に動きが少ないようなら5cmずつ伸ばす。

■仕掛け図

竿●竿一杯で底が取れる長さ
ミチイト●0.8号

ウキ●パイフトップ
※ポディーサイズは22ページに掲載

ハリス●上下0.4号
(平日) 32cmと40cmスタート
(土日) 37cmと45cmスタート

ハリ●上下6号

エサ落ちちはハリが底に付いた状態でトップの3分の2ができるよう設定する。

※基本は釣り人が見やすい色に設定しましょう。

ダンゴとグルテンの中間エサ

●エサブレンド

「ダンゴの底釣り芯華」150 cc+
「わたグル」50 cc+
水 120 cc



+



+



エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号

●作り方と打ち始め

「ダンゴの底釣り芯華」150 cc、「わたグル」50 ccをグルテンボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 120 ccを注ぐ。全体に水がいきわたるよう20回ほどよく混ぜる。若干固まりだしたタイミングでグルテンボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。3～4目盛りのナジミ幅ができればOK。それより浅ナジミならさらに押し練りを加える。

●ウキの選択

ウキのサイズは竿の長さ（＝水深）によって変わってきます。竿の尺数ごとの目安を記しましたが、迷ったときは大きめを選択してください。

竿の長さごとのウキのボディサイズ

8尺	8cm	13尺	11cm
9尺	9cm	15尺	13cm
10尺	9cm	16尺	14cm
11尺	10cm	18尺	16cm
12尺	11cm		

●ナジミ幅を意識しよう

底釣りでは、ウキのナジミ幅が重要な情報源です。エサ持ちの有無だけでなく、底が掘れた（ヘドロなどが取れること）、ハリスが絡んだなどを知る手がかりです。中間エサの底釣りの場合、3～4目盛りのナジミ幅がでるのが基準です。これよりナジミが少ない場合は、エサが持っていないかタナをはわせすぎていることとなります。逆に多い場合は、タナが底から切れている、ハリスが絡んでいる可能性があります。そして寄る魚量が増えても同じナジミ幅をキープできるようにエサを調整（押し練り、手揉み、エサの大きさ）して釣っていきます。

●上手く釣れないときは……

中間エサの底釣りでウキの動きがおとなしい場合は、それほどへら鮒の活性が低い証なので両グルテン、ウキが動きすぎるときは活性が高いので両ダンゴへとエサを変えてみましょう。

バランスの底釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

ダンゴとグルテンと中間エサは、水に入ると水分を吸って膨らみ魚のアオリが強いときはハリから抜けやすくなります。活性の高い魚と低い魚が混在する春先は、活性や寄り具合によって微妙な調整が求められます。エサ付けの圧や大きさも工夫しましょう。



左が基エサ。右が押し練りを何度か加えた状態。押し練りをしてエアーを抜いていくとエサが持つようになる。魚が寄ってナジミが浅くなればさらに押し練りを加える。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しつけてエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



③ウキをズラす

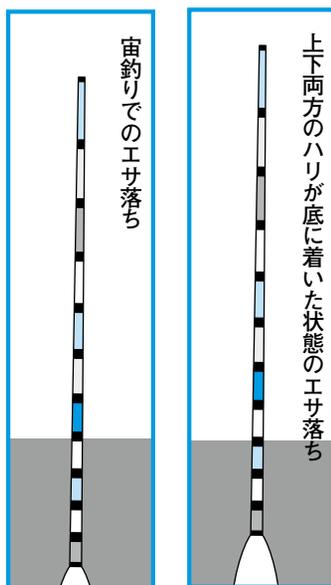
水面にでたトップ先端の位置に合わせるようにミチイトに目印のトンボを付け、その位置に宙で決めたエサ落ち目盛りを合わせる。これが上バリトントンといわれる設定だが、これでは上ハリが底から切れる可能性が高いので、ここから5cmウキを上へ動かしてスタートする。



目印のトンボを基準にしてウキの位置を動かす。

④上下両方のハリが底に着いた状態のエサ落ちを確認

ウキをズラしたらエサを付けない状態で打ち込み、エサ落ちを確認する。上下両方のハリが底に着いていれば、上下両方のハリが底に着いた状態では7目盛り以上水面にでることになる。ただし、実釣においては水流や底の状態などで必ずこの目盛りがでるとはかぎらないが、7目盛りより沈んで戻ってこない場合はタナをズラす(深くする)かタナを測り直すこと。



仮に宙で決めたエサ落ちを7目盛りだしとすると、上下両方のハリが底に着いた状態では7目盛り以上水面にでることになる。ただし、実釣においては水流や底の状態などで必ずこの目盛りがでるとはかぎらないが、7目盛りより沈んで戻ってこない場合はタナをズラす(深くする)かタナを測り直すこと。

バランスの底釣り

タナ取り方法

●タナ取り

底釣りはタナ取り（水深を測ること）がすべてといわれるほどタナは重要です。釣りを始める基準であり、地形変化や底の状態の変化（釣っている途中でヘドロやゴミが取り除かれて水深が変わること＝底が掘れた）を知るための唯一の手段です。このタナ取りをおろそかにしては底釣りは釣れません。動画でわかりやすく解説しているのでチェックしましょう。

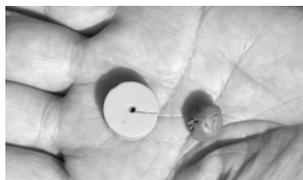


①宙の状態のエサ落ちを確認

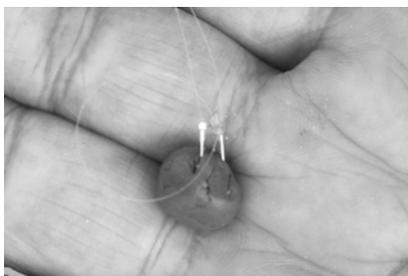
上下両方のハリを付け、宙釣りの状態のエサ落ちを確認する。

②タナを測る

上下両方のハリにタナ取りゴムを付け、ウキにフロートを差して水深を測る。普通に打ち込むと沖を測ってしまうので、ウキを持ち上げるように竿先をあげ、ウキの下にタナ取りゴムがくるようにする。トップ先端が水面にでる位置にウキをセットする。この時、左右の水深も測っておくこと。



タナ取り時は、フロートとタナ取りゴム（粘土オモリ）を使うと素早く測ることができる。



タナ取りゴム（粘土オモリ）に上下2本のハリを刺してタナを取る。



タナを取る際は、竿先を持ち上げて実際に釣る位置までタナ取りゴムを寄せて測る。

早春から始まる

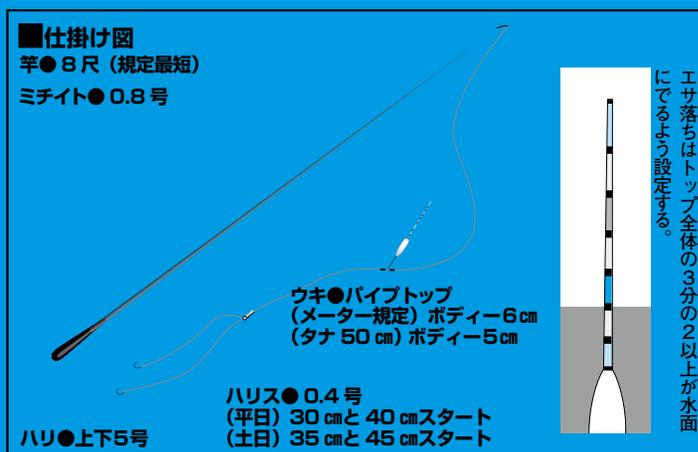
両ダンゴの浅ダナ釣り

釣り方の基本

盛期の釣りの代表格である両ダンゴの浅ダナ釣りですが、シーズンによっては早春（3月頃）から釣れ出すこともあります。ただ、最盛期とは違いへら鮎の寄りも少なく、活性もそれほど高くないことが多いので、仕掛けやエサはワンランク落とした弱いものを使います。それでも釣り方の基本は同じ。一番重要なのはエサを持たせることです。ダンゴエサそのものを食わせる釣り方ですので、まずはエサが持っていないでは始まりません。エサの重さでウキのトップ先端までナジませるよう心がけましょう。ひとつ付け加えるなら、この時季はへら鮎の寄りが盛期ほどでないで、寄せることを意識して、エサ打ちの回転を早くしましょう。

タックルセッティング

盛期の両ダンゴ釣りくらべるとライトな設定。ウキは小さく、ハリスは長く、ハリが小さくとワンランク落としたところからスタートする。



軽くて持つ早春ブレンド

●エサブレンド

「カクシン」500 cc+
「浅ダナー本」200 cc+
「BB フラッシュ」100 cc+
水 200 cc



+



+



+



●作り方と打ち始め

「カクシン」500 cc、「浅ダナー本」200 cc、「BB フラッシュ」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 200 cc を注ぐ。ムラがないように大きく 20～30 回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを 1/3 に小分けして 10 回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てば OK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

●タナを調整する

しばらくエサ打ちしても何の反応も得られないときは試しにタナを深くしてみよう。水温が低いとへら鮎は上層に上がってこないこともある。たとえメーター規定のある釣り場でも1mのタナで釣らなくてはいけないことはないのので、10cmずつ深くして様子を見てみよう。逆に活性が高いときはタナを浅くします。タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすることで余計な動きが減り釣りやすくなります。

●ハリス調整

少しでも魚の反応を得たいのでスタート時の設定は長めにしています（平日30cmと40cm、土日35cmと45cm）。これでアタリが多くでて、空振りやイトズレなどが目立つときは5cm詰めてみよう。それでも空振りが多ければさらに5cm詰めていきます。もしハリスを詰めてアタリが減るようなら元の長さに戻すこと。動きが減ってしまうより動きがあるほうを優先しましょう。

●手水は慎重に……

エサをやわらかくするために手水をすることもあるでしょう。手水と押し練りで調整という表現もありますが、まずはエサを持たせることが優先ですので、押し練りのみで調整します。硬くて持つエサで釣ればそれで問題ありません。強いアタリがでて空振るようならハリスを詰め、それでもカラツンが解消できないとき、濡らした手で押し練りをし少しだけエサのタッチをやわらかくします。やわらかいエサはエサ持ちが悪くなりますし、エサ付けも難しくなりますので、注意が必要です。

●上手く釣れないときは……

しばらくエサ打ちしてもサワリやアタリがほとんどない、ウキが動かないときは、両ダンゴが成立しない状況と判断します。周りの釣れ具合を確認して浅ダナセット（2ページ）、チョーチンセット（6ページ）や段差の底釣り（10ページ）に切り替えましょう。

両ダンゴの浅ダナ釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

元々ネバる素材をブレンドしてエサ持ちのよいエサに仕上げますが、作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。



写真右側がエサをかき混ぜただけの状態（基本エサ）。左上が押し練りを加えた状態。エアアを抜くことでエサが丸めやすくエサが持つようになる。打ち始めから押し練りを加えた状態から使い始めること。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアアを抜くのが“押し練り”。エアアを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



早春の野釣り

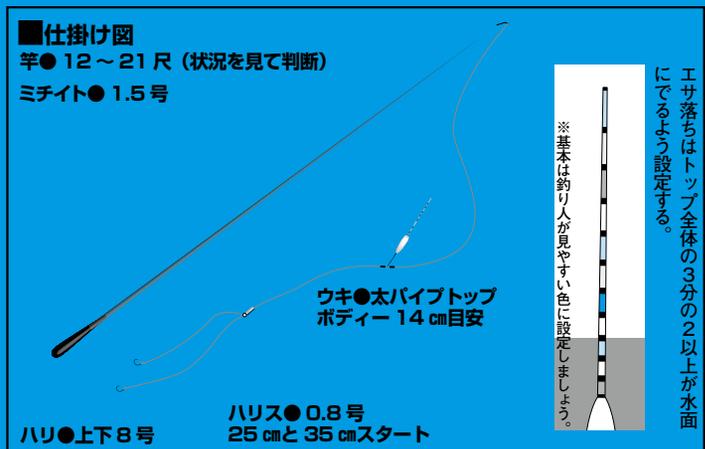
平場の底釣り

釣り方の基本

早春（3月頃）を迎えると水深の浅い平場の釣りがシーズンインを迎えます。水温の上昇とともに日を追うごとに浅場にへら鮒が入ってきますので、これを狙います。産卵期の大型をねらう乗っ込みの釣りの前哨戦的な位置づけで、ときには思わぬ良型が釣れることもあります。狙う水深は1.5～2m。竿の長さはへら鮒の回遊次第で変わりますので、もじりを見たり、常連さん達が振っている竿の長さを参考にします。一般的な傾向として早期は長めで沖打ち、暖かくなるにつれ次第に竿が短くなります。基本はバランスの底釣りですが、流れがある場合はハリスオモリやドボンでエサを止めて釣って行きます。エサはダンゴとグルテンを使い分けます。両ダンゴ、両グルテン、グルテンセットを臨機応変に打ち分けましょう。

タックルセッティング

思わぬ大型を想定して仕掛けは太め、強めにする。ウキも大きめで大きなエサを抱えられ、視認性が高い太パイプを使う。エサを確実に持たせられるようハリも大きめを使う。



寄せ効果抜群のダンゴエサ

●エサブレンド

「ダンゴの底釣り芯華」 150 cc +
「ペレ底」 50 cc +
水 100 cc



+



+

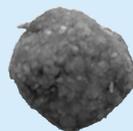


●作り方と打ち始め

「ダンゴの底釣り芯華」150 cc、「ペレ底」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜたらボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。これで4～5目盛りのナジミ幅ができればOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=8号

開きと膨らみでアピールするグルテンエサ

●エサブレンド

「新べらグルテン」100 cc+
「わたグル」25 cc+
水 100 cc



+



+



●作り方と打ち始め

「新べらグルテン」100 cc、「わたグル」25 ccをグルテンボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 100 ccを注ぐ。全体に水がゆきわたるよう 20 回ほどよく混ぜる。若干固まりだしたタイミングでグルテンボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。3～4目盛りのナジミ幅ができれば OK。それより浅ナジミならさらに押し練りを加える。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=8号

平場の底釣り

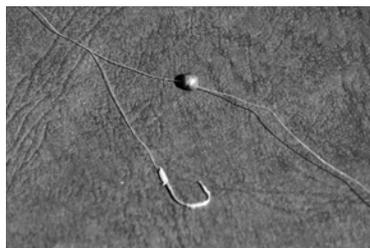
実釣基本テクニック

●流れ対策

流れがある川の釣りはもちろん、風流れなどあらゆる場面で流れが起こるのが野釣り。多少の流れならバランスの底釣りで釣りになりますが、極端にウキが流されてしまうと釣りになりません。そんな場面では、流れ対策として仕掛けを止めるハリスオモリやドボン（オモリベタ）の釣りを試しましょう。

ハリスオモリ

エサや仕掛けが流れないようにする工夫としてハリスオモリという方法があります。ガン玉をハリスに付けて止める方法で、ガン玉を下ハリスの上バリがくる位置にセットするのが一般的です。流れが緩い場合は、ハリスオモリで十分止まり、バランスの底釣りに近いので、ウキが動きやすいメリットがあります。

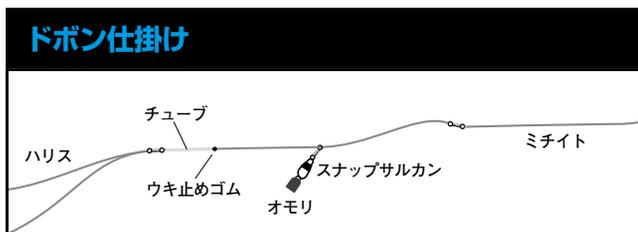


ドボン（オモリベタ）

ドボンとは、外通しまたは中通しオモリを用いてオモリベタ（オモリを底に着ける）で釣る釣り方です。野釣りで多用する釣り方で、オモリベタにすることで流れのある川や魚影の少ない釣り場などでエサを止めてじっくり狙うことができます。また、風が強くて振り込みが難しいときにも有効です。

ドボン仕掛け

オモリの大きさは単純にオモリが流されない大きさ。「ギリギリまで軽くする」など神経質にならなくてもよい。



●浅ダナウドンセット



冬場のウドンセットではくわせエサは軽いほうが有効。「感嘆」、「カ玉」とともに軽くくわせエサだが、きれいに丸い「カ玉」のほうが、落下時の抵抗が少なくすっと落ちる。多少いびつになる「感嘆」は水の抵抗を受けて不規則な落下を演出する。日によって当たり外れがあるので打ち分けて試したい。

●チョーチンウドンセット



チョーチンセットも浅ダナセットと同様の考え方でOK。使い分けるタイミングは、アタリがでないとき、カラツが目立つとき、魚の寄り具合が変わったとき(多い、少ない)など状況が変わったときにくわせエサを変えてみるというだろう。

●段差の底釣り



段差の底釣りは、くわせエサが底に着いていることが条件。それゆえに重さのあるくわせエサが求められる。性質表にあるとおり、重いくわせエサの「魚信」や「カ玉ハード(L)」を選択したい。また、目立たせることでアピールにもなるので大きめのくわせエサを使う。

くわせエサの 使い分け

セット釣りで使用するくわせエサにはいくつかの種類があります。なぜ何種類もあるかという、釣り方や魚の活性によって釣れたり釣れなかったりの差がでるからです。基本的な考え方はくわせエサの重さです。渋いときは軽く、活性があると重くが一般的。ここでは、いくつもあるくわせエサの特徴や使い分けをまとめましたので参考にしてください。

くわせエサ性質表

← 強		ネバリ (粘着性)		弱 →	
					↑ 軽
					
					重さ
					
					↓ 重
					

すべての粒子が、 下へ、下へ。

つれるエサづくり一筋
丸マルキュー

狙いのタナまで送り込みやすい重さを備え、
魚をタナへ呼び込む集魚力とバラケ性を
高いレベルで発揮するバラケエサ。

粗目の素材を多く含んで
いながらもよくまとまり、
タナではエサ玉の外側から
次々と剥がれ落ちるように
真下へ向かって拡散。

舞い上がったり
漂ったりする粒子が極めて少なく、
ウズリを抑え込みながら
攻撃的な釣りが展開できます。

●ヤグラ 350g(チャック袋)

シーズン到来



へら鮎天国

X (旧:Twitter)、Facebook、
Instagramで情報配信中!

丸マルキュー株式会社

〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4 TEL.048-728-0909

ホームページアドレス <https://www.marukyu.com/>

2023年12月発行 16500部 発行元 マルキュー株式会社